公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会

新型コロナ危機から立ち上がる「臨床心理士のこれから」を創新するための援助金助成事業

コロナ禍の学校における教師の工夫

――教育相談の視点から――

令和５年１月

研究代表者：松波美里

粟飯原拓也・松本拓磨・加藤のぞみ・樹下勝弥

（三重県教育委員会事務局研修企画・支援課教育相談班　臨床心理相談専門員）

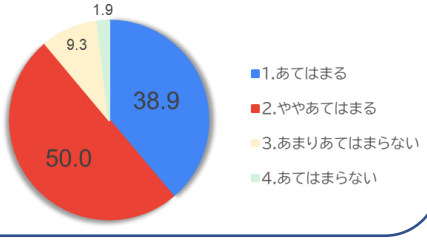
新型コロナウイルス感染症の流行下（以下、コロナ禍）で、先生方は子ども理解や子どもとのかかわりに工夫しながら取り組んでおられることと思います。そのような状況で臨床心理士がどのようなサポートを行えるのかを検討することを目的とし、研究を行いました。小学校管理職 2 名へのインタビュー調査（2022 年 3 月）、小中学校教師 56 名へのアンケート調査（2022 年 8~9 月;定量調査・自由記述調査）からわかったことをまとめました。（本研究は公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会「新型コロナ危機から立ち上がる「臨床心理士のこれから」を創新するための援助金助成事業」の助成を受けています。）

□コロナ禍の学校で教師に生じている難しさ

○多くの教師が子どもについて「気になること」がある

気になることとして、**子どもの問題行動**（不登校、ゲーム依存など）や、**不安・消極的・イライラ等の心理状態**が挙げられました。さらに、かかわりの少なさ等が、**子どもの心の成長に及ぼす影響**についても懸念を抱いています。

コロナ禍の子どもの心の状態について気になることがありますか。



○人間関係の築きにくさ

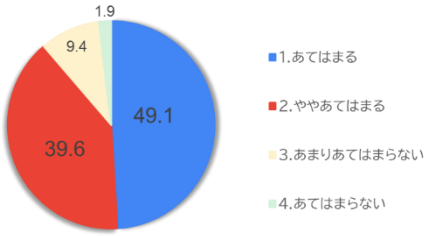
子ども同士の距離が近いと指導を入れなければならなかったり、ソーシャルディスタンスを意識すると教師から子どもへ気持ちを伝えにくかったりして、**子ども同士や子どもと教師の関係の築きにくさ**を感じています。教師が**本来は必要と感じているかかわりを行いにくい**ようです。

○対策しながらの授業・指導の難しさ

オンライン授業や制限のある授業により、グループワーク等の“横のつながり”を活かした授業や、対面だからこそ伝わるような授業を行いにくく、**仲間づくりや学力保証ができるか**について懸念しています。慣れないオンライン授業には**やりにくさを感じる**声も聞かれました。

教師の葛藤・不全感

コロナ禍における必要な対応（ソーシャルディスタンスの確保、オンライン授業など）を子どもたちに行うことに葛藤がありますか。



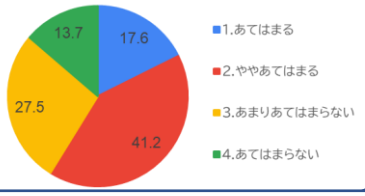
【アンケートからの声】

- 全校集会での表彰の機会が減り、子どもの頑張りを認める場が少なくなった。
- 子どもに触れることに迷いが出てしまう。
- オンライン授業では、対面授業ならではの良さを活かせない。
- 給食が「食べる」だけとなり、今まで大切にしてきた食育を無視したやり方になっている。

○教師同士の関係性が希薄になったと感じる教師もいる

業務以外でかかわる機会が減ったと感じたり、お互いのことを知って、**深く付き合うことが少なくなった**と感じたりするという声もありました。

コロナ禍で教師同士の関係性が変わったと感じますか。



教師自身が、疲弊、神経質さ、イライラを感じるという声も…

□コロナ禍を生き抜く工夫

コロナ禍の難しい状況を教師や子どもたちが工夫して乗り越えている様子も見られました。

○子どもの底力を活かす

制限の中でもできることを**子どもたちから主体的に提案する**姿や、**“新しい日常”に順応する**姿、**元気に登校する姿そのもの**に子どもたちの底力を感じるようです。さらに、教師が子どもとつながる工夫をして、その**底力を活かそうとする姿**が見られました。

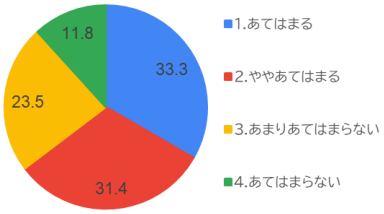
例）・制限のある行事の中で、子どもたちからの「こういうことだったらできるかな」という提案について一緒に考える。新しい遊びを生み出す。

・ハイタッチしていたところをひじタッチにする。

・オンライン授業でも、子どもに話しかけるように意識する。

⇔「底力」を感じることが難しい状況も…

コロナ禍において、子どもたちの底力を感じたことがありますか。



子どもたちに“無気力さ”を感じるという声も多くありました。行事など、**教師が子どもたちの新たな面を発見できる機会が制限されている**ことも影響の1つとして考えられます。しかし、そのような場がない中でも、**コロナ禍の変化の多い中で登校し、学校生活を送る子どもたちの適応力に目を向けてみる**ことは、教師にとっての支えとなるのではないでしょうか。

○教師同士で共有する

教師同士で ICT 機器の使い方を教え合ったり、教師の急な休みに備えて協力体制をしいたりして、**それぞれの専門性を共有すること**が教師の支えとなっているようです。

例）・若い先生がタブレットの使い方を年配の先生に教えている。

・トラブルが生じると、関係のある先生に声をかけて、意識的に話し合う機会を作るようにしている。

○教師同士で共感的にかかわる

教師同士で声を掛け合うことが、教師の支えとなっているという声もありました。

例）・教師同士で、大変なことを「大変ですね」と言い合ったり、たわいもない話をしたりする。

○これからにつなげようとする

オンライン授業が必要となり急速に取り組んだことで、**今後の ICT 教育への備えができた**という見方をする声や、会議や学校行事などの**従来の業務を見直すきっかけとなった**という声も多くありました。コロナ禍の現状を仕方ないものと引き受け、それだけでなくさらに**これからのためにつなげようとする姿**が見られます。

慣れないことの多いコロナ禍で、教師が不全感を覚えることや、子どもたちの気になる姿が目につくことは生じやすいでしょう。そんな時に、教師が自身や子どものありのままの姿に底力を見ること、教師同士で共有することを通して助け合いや労いなどの基本的なかかわりに取り組むこと、それらが教師自身の余裕をつくり、今行っていることを別の角度からとらえて、これからにつなげる見方を取り入れやすくなるのではないでしょうか。

□グループワークの提案

私たちは、教師が教育相談について自主的に学びを深めるために「振り返りを通して教育相談を主体的に学ぶワーク」「グループイメージデザイン法」という2つのワークを作成してきました。これらは、多忙の中でも先生方が子どもの姿に目を向け、さらに話し合いをしやすい場を提供しようとするものです。

○振り返りを通して教育相談を主体的に学ぶワーク　（資料①）

振り返りによる主体的な学び（セルフコンサルテーション）に、多忙な学校生活のなかで取り組みます。個人ワーク（教育相談についての普段使いのワークシート）では、日々の実践と「気になる子」についてワークシートに沿って振り返り、グループワーク（その子のめあてと私のめあて）では、それらの内容について、集団で対話しながら理解を深めます。

教師が子どもとのかかわりについて自身の感覚を活かして振り返ることで、日々の実践の中では気づかなかった子どもの姿に目が向きます。また**教師同士がお互いの実践を尊重して学び合う**ことで、かかわりについて前向きでより深い理解を得られます。

○グループイメージデザイン法　（資料②）

グループイメージデザイン法は、名前やイニシャルを記入したネームシールをカラーマグネットに貼り、それを子どもや大人に見立て、ホワイトボード上に置いて自由に動かしつつ、線や文字で関係性を記入することで人間関係を図として視覚化していきます。その後、図に表したものを用いつつ参加者全員でディスカッションを行い、気になる子どもの置かれた状況を話し合いの中で整理・理解しながら、その子へのかかわり方や必要な支援を検討する方法です。気になる子どもを中心とした振り返りを視覚的に行うことで、**クラス全体の人間関係を別の視点から捉え直す**ことができます。また、そこで得られた理解をもとに、今後の対応につなげていきます。

＜アンケートから見た 2 つのグループワークの特徴＞

α県の2つの小学校の教師を対象に、それぞれのグループワークを実施し、コロナ禍にある教師にどのような変化をもたらすかについてアンケートを用いて検討しました。

◇共感的に、様々な意見を出しながら気になる子について考えを深める話し合いができる

「事例の子どもについて理解を深めることができた」「色々な視点から話し合うことができた」「一緒に考える雰囲気があった」の質問に、100%が「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答。

◇子どもについて理解を深めること、教師同士で話し合いをしようとすること、自分の感覚を活かして子どもとかかわることへの動機づけになる

「事例の子どもだけでなく、自分が担当している子どもについても理解を深めたい」で 88%、「子どもについて気になることがあれば教師仲間と共有したい」で 84%、「自分の感覚を活かして子どもたちとかかわっていきたい」で 70.8%が「強まった」と回答。

◇コロナ禍の葛藤の多い教育の中で、自分のできていないことに目が向くこともある一方で、自分の頑張りに意識を向けることにもなりうる

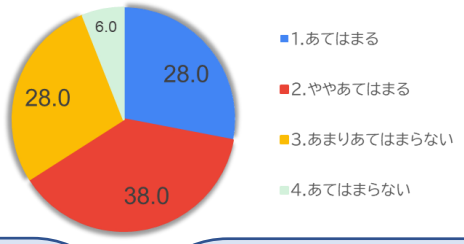
「子どもとのかかわりについて、コロナ禍でできていないことが思い浮かんで苦しく感じる」で 12.5%、「コロナ禍での教育実践において、自分ができることを頑張っていると感じる」で 25%が「強まった」と回答。

ワークの資料は本冊子の付録にあります。ぜひご活用ください。
三重県総合教育センターHP からもダウンロードできます。https://www.mpec.jp/?page_id=133

□ポスト・コロナの学校に向けて

◇<u>コロナ禍を通して、程度の差はあるが教育についての見方に変化が生じている</u>

コロナ禍で教育についてのスタンスや見方が変わったと感じますか。



○<u>大事なことの再確認</u>

コロナ禍の教育を通して、対話することや、他職種との連携を含めた、**人と人とのつながりの大切さ**を改めて認識するという声が多くありました。制限によって人と人がつながりにくい中で、つながりの大切さを感じるというのは逆説的ではありますが、制限があるからこそ、**今まで当たり前に感じていたものの必要性を感じる**のでしょう。

また、子どもや教師自身の健康を守るという意識も再確認されたという声もありました。安定した日常を送ることができている時には、成長することやできるようになることに目を向けがちになるでしょう。しかし、その日常が揺らぐ時は、人と人のつながりや、健康など、**日常を送るための土台となるものを確かめるきっかけになる**のではないでしょうか。

○<u>業務や価値観の見直し</u>

コロナ禍で制限することが多くなったことで、今まで当たり前に行われていた会議や行事が本当に必要なのかを見直すことになっているという声が多くありました。形骸化していたものの意味を考え直すことは、業務の負担を軽減することにつながるだけでなく、**それが何のために行われることなのかを考え、認識し直すことにもつながる**のでしょう。

また、コロナ禍で多くのことが変化を迫られる中でも、子どもたちにとって最大限できることをやるということに変わりはない、という声もありました。このような**“今できることをできる範囲で最大限やる”**という姿勢は、今後生じうる様々な教育課題に対しての備えになりうるのではないでしょうか。

＜編集後記：コロナ禍は学校にとって特異なのか？＞

学校では、災害や事件・事故など、様々な緊急事態が生じる可能性があります。コロナ禍がそのような緊急事態とどのように異なるのかと尋ねると、長期化（先の見えなさ、対策の惰性等）や扱いにくさ（コロナ不安などコロナ特有の扱いにくさ、一貫した対策の取りにくさ等）が挙げられました。一方で、「コロナ禍の学校が今までの緊急時の学校と違うと感じますか」という問いに対しては「あてはまる」「ややあてはまる」が 66.7%であり、必ずしもコロナ禍が今までの緊急時の学校と違う特異な事態とは言えない結果となりました。この結果は、日常を大きく揺るがしたであろう事態をも日常へと変化させていく、いわば、学校のもつ“抱える力”を感じさせるものでもありました。調査の中で「“子どものために”は魔法の言葉」という声がありましたが、あらゆる事態が生じても、教師一人ひとりが子どもたちの教育を何としても進めていこうとする強力な力が、コロナ禍の教育を通して見られました。

今回の研究が、多忙な毎日を送る先生方にとって、子どもたちとの日常を思い返し、先生ご自身や子どもたちの頑張りを認めて、明日からの教育に少しでもお力添えができることになれば幸いです。

本冊子についてご意見やご質問がありましたら、下記にご連絡ください。

三重県総合教育センター研修企画・支援課　教育相談班
研究代表者：松波美里
059-226-3516